

『ものづくり 木のおもしろ実験』 作野友康・田中千秋・山下晃功・番匠谷薫 編
A5判 110ページ 1,400円(本体) 海青社 2005年3月刊

本著は、中国地方の木材科学、木材技術、木材加工の専門家たちにより、子どもから成人に至るまで、木材の性質や特性を、実験や工作を通して親しみつつ、循環型資源である木材を利用したものづくりへ導いてくれる貴重な一冊である。

目次は、第1章 木材を加工し、ものづくりをしよう、第2章 木材の特徴と性質をよく知ろう、第3章 木材の上手な使い方を考えよう という3章からなり、最後に、資料として木工体験のできる施設が紹介してある。特に第2章と第3章では、子どもも大人も楽しめる実験や工作が紹介されており、木に親しみ、木の特性や性質を知ることができる内容になっている。

ところで、読者も承知のとおり、わが国は先進国では極めて珍しい、豊富な森林資源を持つ国である。国土の約7割を森林が占める国は、フィンランドやスウェーデンといった北欧を除けば、先進国の中ではわが国くらいであろう。そうした豊富な森林資源を持つ国でありながら、木や森林、そして木材と親しむ機会は極めて限定されているのではなかろうか。

これだけ森林資源が豊富な国でありながら、わが国の森林資源に係わる政策は、戦後の高度成長期に輸出型産業を中心にした貿易立国政策などにより、次第に等閑視されるようになった。付加価値の高い工業製品などを海外に大量に輸出し、

反対に海外からは一次産品を輸入する貿易構造としてしまった。安い木材やバルブが海外から大量に輸入され、国産木材が殆ど見向きもされない状況になった。

ヨーロッパの人たちは森林を開墾し、畑にすることで農業生産力を高めたものの、森林資源を大きく消費してしまうことになった。そのため、意識的に都市の周辺に森林地を造成し、その森林の中を歩くことを日課にする人がいたり、休暇時には森林の中で家族とゆったりと過ごすことが当たり前のように行なわれている。また、材料として木を使った家屋作りや家の調度、家具作りなど、生活の中で木や木材と親しむ活動が盛んに行なわれている。

森林資源に恵まれたわが国で、ヨーロッパ以上に、もっと森林を楽しみ、豊かな生活を送れるのと感じてきた。そんな中で、この本は木や木材、森林と親しみ、森林資源を大事にし、木材の持つ良さを生かした木材加工や工作などを普及させるための良い一冊ではないかと思う。できれば、第2章、第3章から読めば、さらに親しみやすいものになるであろう。第1章に木材加工用の機械操作などが出てくるので、木材加工の専門書と勘違いしてしまうほどだった。第2章から始めれば、子どもも楽しく実験しながら木材に触れ、木材加工や工作へと導いていける良い入門書である。(沼口 博)